

日、大豆何程買しを知たり、馬の口も限りあり、是は買置にあらずや、其外證據多しと云つめたり、如此の人今は不聞、

〔常山紀談 二十三〕土屋但馬守數直執政たりし時、金座の者ども相はかりて、金に銀を入れて、ふきかへられなば、日本國の金甚多くなるべし、金の色の損するのみにて、莫大の利なれども、但馬守用いられじ、但馬守だに此事を聞入られなば、事行はるべしといひたるを、數直に申す人あり、兎角の答なくて、打過られしかば、又人をして問せしに、但馬守是は邪なるわざなり、金を以て天下の寶とするは純物なるが故なり、其實を悪くせんとや、思ひもよらぬ事なりといはれけるとぞ、

〔吉備烈公遺事〕津田永忠左源十六七ノ頃ニヤ、寢ズ番シテ居タリシニ、公池田今ノ自鳴鐘ハ、何

時ヲ打タルヤト問セ給フ、永忠承リ、只今寐入候テ、知ラズト申ス、公默シテオハシマス、夜明ケテ、永忠ガ座ヲ立ケルヲ見給ヒ、事ヲナスベキ男ナリト、獨リ言シ給シガ、永忠十八ノ時、目附職ヲ被命ケリ、其日執政ノ人々、公務終リテ後、物語有シニ、永忠末席ヨリ、此所ハ長嘯スル處ニアラズト、譏ケリ、大臣タチ、公ノ御前ニ參、爾々ノコトノ候ヒキ、二十ニモ不足モノ、アマリナルコトナリト申セシニ、公偕ハ予ガ視ル處タガハザリキ、思フコト憚ル處ナク云ン者ナリト、思ヒタリシニ、果シテ然ナリト、仰ケルトゾ、亦永忠御前ニ參テ、申コトノ有ケル後ニ、彼ノ者ハ馭者アシクバ、國ノ禍ヲナスベキ也、才ハ國中ニ獨歩セリト宣ケリ、

〔吉備烈公遺事〕酒井空印入道ナリシヤ、道中ニテ伊勢參宮ノ小兒、十二三歳バカリノ者ニ逢ヘリ、錢ヲトラセテ、汝ガ國ハ何方ゾト問フ、小兒曰、備前岡山ノ城下ニ侍ル、入道其聲ヲ聞テ、否々汝ガ言聲ハ、大和トキコユルゾ、前言ハ虚ナルベシト云、小兒腹ヲ立テ、吾國岡山ノ百姓ニ、嘘ヲ云フ者ハ候ラハズト、貫シ錢ヲ投捨テ去ル、入道大ニ感歎シテ云、新太郎今世ノ君子ト聞ケリ、今ニシテ信ゼリ、吾過テリ、